

「噴煙と噴気はちがう！」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

浅間山にしても、箱根にしても、火山活動の報道には「噴煙」ということばが、頻繁に使われる。「今日の浅間山は、白い噴煙を山頂から高さ200メートルほどの高さまで上げていました。」という具合である。実はこの表現は、明らかに誤っている。

「噴煙」とは、火口(山頂火口とは限らない。寄生火山の火口も含む。)から噴出されるもののうち、何らかの固体の碎屑物を含むものをさす。具体的には、火山灰、火山礫、珍しいものでは、「火山毛」なども含まれる。これらの固体碎屑物が含まれた火山噴出物が火口壁の外に出た状態を「噴火」と称する。つまり、「噴煙は噴火時にしか見られない」ということになる。テレビのアナウンサーが言うように「今日も噴煙が見られました」となると、浅間山は常に「噴火しっぱなしの火山」ということになってしまう。



浅間山の「噴煙」 2004年9月15日撮影

先に上っていた白い煙とは明らかにちがう、重量感のある黒い煙をあげている。これが風に流されると、風下には火山灰や火山礫が降る。火山灰が降る方向(降灰軸)は、単純に上空の風向きだけに依存する。日本の火山の場合、偏西風の影響を受けて、火山の東側に降灰が観測される場合が多い。

報道で言われている「噴煙」は、ほとんどの場合、気体と液体の混合物である。具体的には、火山ガス(二酸化硫黄など)と水蒸気、それに水蒸気が露点に達し

て雲粒になった「湯気」の混合物である。火山ガスの成分によっては、青っぽく見えることもあるが、基本的に軽く、黒や灰に色がつくことはない。



浅間山の「噴気」 2015年6月13日

素人目には「噴火」にも見えるが、噴出しているものはガスと水滴のみで、固体碎屑物は含まない。従ってこれは「噴煙」ではない。この程度の白煙は、浅間山では一年中見られる。

では、こうした気体と液体の混合物で構成された火山噴出物(けむり)を何と呼べばいいのか・・・実は火山学での明確な用語はないのだ。しかし、「噴煙」は明らかに誤りなので、「白煙」または「噴気」とよぶのがふさわしいだろう。教育現場でも、「噴煙と噴気はちがう！」ということ徹底しいものである。



「硫黄山の噴気活動」(北海道) 基本的には平穏時の活火山の火口と変わらない「噴気」が見られる。